

〔 〕は訳者による補足を示す。
邦訳がある場合は、邦訳情報を付した。本文中に引用された文章は、すべて訳者による独自訳である。
本文中の書名は、未翻訳のものは初出に原題とその逐語訳を記した。

はじめに ムダのない世界に向けて

ネットショップでパソコンのケーブルを注文したとしよう。商品の入った箱が配送トラックで自宅に届き、ハサミはどこだと一〜二分ムダにしてから、重ね貼りされたテープを切りひらく。

外箱はあとでゴミに出すとして、まずは中から商品を取りだし、包装をあげ、その包装も捨てる。購入したケーブルがようやく姿を現す。

ところが、パソコンにつながるケーブルとあれこれ試して何分かムダにしたあげく、なんだよ、違うケーブルを頼んじゃったみたいだ。本当に必要なのはどれだろう？ さらに時間をムダにして調べる。返品するケーブルを梱包しなおすのに空しく時間を費やし、オンラインの返品手続にまた何分かが奪われる。

配送トラックが集荷に来て、どこかの返品センターに急行し、そこで担当者が箱をあげ、返金の手続きをし、商品をメーカーに送りかえすか、返品商品用の大箱に入れておくかし、後者の場合はどこかの会社がそれをまとめて仕入れるかもしれない、そうしたらその会社は商品をぜんぶ選りわけ、ジャンルご

とに分類し、それを販売するための作業に取りかかり、それから……って、いや、もうわかってくれたと思う。

おまけに、交換してもらったケーブルが不良品だったらどうなる？

たった一回の購入ミスでどれだけの面倒が降りかかってくるか、考えるだけでうんざりする。しかもこんな大騒ぎをたいの人がごく普通に経験している。こういうミスが積もり積もれば、はかり知れないほどのムダになる。

そうはいっても、この先本書で待ちうけるムダの大きさに比べたら、ケーブルの購入ミスなど可愛いものである。もっとカメラを引いて全体を眺めてみれば、広大なムダの海が横たわっているのに気づくはずだ。そこでは交通渋滞で時間をムダにしたり、車の排熱がムダになったりするのほもちろんのこと、戦争までもがムダと切りはなせない関係にある。こうしたムダの事例についてはすべて本書でじっくりと探っていく。しかしムダの元凶を追究するだけでは、問題の上っ面をなでているにすぎない。さらに一歩下がってみると、もっともっと大きなムダの世界があらわになる。貧しい人たちの潜在能力が発揮されないままに終わり、死ななくてもいい人の命が意味なく失われ、ほかにもさまざまなムダのまかり通る世界が。

ムダはいたるところにある。見抜く目を養いさえすれば、ムダがそこらじゅうに転がっているのがわかるだろう。ガソリンスタンドで車を満タンにするときには、どうしても何滴かガソリンがこぼれてしまうものだ。今度そんなことがあったら、ぜひ思いだしてほしい。その数滴を毎度毎度ぜんぶ足していっいたら、わずか一年でエクソン・バルディーズ号の原油流出事故にも引けを取らない大変な量になる

のだと。しかもそれが毎年続く。アメリカだけで。芝刈り機などの庭用機器にガソリンを入れるときに漏れる分も同じである。残らずためていっいたら、やはりそれだけでエクソン・バルディーズ級の原油流出事故が毎年起きているのと変わらない。

タンカーが座礁して原油が流れでたり、パイプラインが破裂したりすれば、かならずニュースの見出しを飾る。けれど、ほんの数ミリリットルのガソリン漏れなど話題にもされない。私たちがだつて「少しムダにしちゃったな」くらいのことを思いはする。だが、ムダや効率の悪さが暮らしの中で積みかさなっていくことには無頓着だし、それが最終的にどんな結果をもたらすかを深く考えることもない。

著者ふたりはこの本を書く際、さまざまなリサーチを通して現代生活にどれだけムダがつきものかを理解しようとした。するとたちまち、ムダにまつわるいろいろなことにいかに自分たちが無知だったかを突きつけられた。そこで、ありとあらゆる疑問をリストアップしてみることにした。たとえば次のような問いである。

- ・ キッチンで液体をこぼしたら、ペーパータオルで拭くのがいいのか、それとも濡れぶきんのほうがいいのか。
- ・ これまでただの一度も戦争が起きていなかったら、世界はどう変わっていたか。
- ・ バルク品（業者向けにロット販売された商品を個人向けにばら売したもの）を安く買って浮いた金額と、それが早くだめになって失う金額とではどちらが大きいのか。
- ・ 私たちは一日二四時間のうちのどの部分をムダにしているのか。

・ダイエットをして痩せたとき、そのなくなった体重は具体的にどこへ消えるのか。

答えが案に見つかる疑問もある。たとえばペーパータオルの件についていうと、濡れびきんのほうがムダが少ない。ただし、蛇口から温かい水が出るまで待ったり、使用するたびにきれいにゆすいだりしないなら、という条件がつく。どちらかをやってみようなら、ペーパータオルを使うほうがいい。

ダイエットに関しては、減った体重の八四パーセントは二酸化炭素(CO₂)として口から吐きだされ、一六パーセントは尿、汗、涙となって水として出ていく。人間の排出するCO₂がムダな廃棄物なのかどうかはのちの章で取りあげる。尿は何の役にも立たず(あなたが尿内のミネラルを再利用する主義なら話は別だが)、汗はそこまでの決めつけはできない(いわずと知れた体温調節という役目を果たしているので)。涙がどの程度ムダかはみなさんの判断にゆだねよう。

ついでにいうと、減った体重の一パーセントたりとも実際に「燃やされる」わけではないし、それが体を動かす力や熱にじかに変換されることもない(体は特殊な分子の化学結合を切断することでエネルギーと体温を得ている)。要するに、口に入れた食物のひと噛みひと噛みが、最後は気体と水になって外界へ戻っていくということである(大便是最近食べたものが元になっているので、そもそも「身」になったことがない)。

しかし、それ以外の領域で生じるムダに目を向けると、そこまで明快にああだこうだとはいきれない。直感と大きく食いちがう答えにもたびたび出くわす。ムダにしか見えない物事であっても、実際には常軌を逸しているわけではなく、少し掘り下げたら綿密な計算がひそんでいるケースは少なくない。たとえばアルミニウムを製錬するのに、地球を半周したところから船で鉱石を運ぶのがなぜ理にかなっ

ているのか。スーパーボウルの優勝チームのロゴ入りTシャツや帽子を製作するのに、大一番で勝ちを逃すチームの分まで事前につくっておくのはどうしてなのか。

誰だって何かをムダにしたい、と思っではないし、なんとかムダを避けようと懸命に知恵を絞っている。それはそれで立派な姿勢だ。しかし、良かれと思ってムダを省こうとすることが、省く以上にムダを増やしている事例も世間には事欠かない。

少し前にアメリカで「フリーガン」(消費主義に背を向け、廃品回収や廃棄食料の利用などを通して生活する人)の一家を特集したドキュメンタリーが放映され、一年のあいだ廃棄食料だけで暮らす様子が紹介されていた。放っておいたらゴミになる食料を飲み食いすれば、ムダと非効率から世界を救えるというのが一家の思いである。ところが、その「ムダにされた」カロリーを手に入れる際には、車を使ってあちこちへ移動していた。それを走らせるガソリンは再生可能な資源ではなく、結局は再生不能な資源を使って再生可能な資源(食料)を取りに行っている。ほかに、運転にかかる時間や、車自体が消耗して価値が下がるなど、ムダと無縁とはいえない。

物事には目に見える部分と見えない部分があり、その両方が本書の大きなテーマのひとつになる。ムダを考えるとき、山ほどの食料が廃棄される光景なら難なく頭に浮かぶ。その一方で、ムダを避けようとするあまり、そこから第二・第三の余波が生まれていることにはなかなか気づけないものだ。ムダを理解するには、何層か深いところまでぐっついていかなければならない場合が多い。そこまでして初めてうわべはムダに思える(もしくはムダがないように思える)ふるまいが、じつはその対極にあることがある。

紙とプラスチックではどちらがいいか。飛行機と自動車ならどちらを利用すべきか。こうした問題はたやすく答えが出そうできて、実際は恐ろしいほどに込み入っている。紙を再利用するのは素晴らしいことではあるが、そのためにわざわざトラックが回収に来なくてはいけない。トラックが古新聞を積んで町の端から端まで走ったら、マイナスの影響がプラスの面を上回る。

この種の判断を下すときには、どちらがまだましかという視点でさまざまな選択肢を検討する必要がある。たとえば、メタンとCO₂ではどちらのほうが環境への負荷が小さくて済むのか。大量の淡水と少量の燃料と、ムダにするならどちらのほうがまだいいのか。

もちろん、どんな燃料かによっても、その淡水がどこから来るかによっても答えは違ってくるし、アイスランドとパキスタンで正解は同じではない。おまけに、勘を頼りにしていたらあっさり間違えてしまうほどに、予想外の答えはたくさんある。ライフサイクル全体でのCO₂排出量を比べたときに、一家のSUV車より飼い犬のほうが大きいだなんていったい誰が思うだろう。

こういう事実を知ったとして、自分の行動をどう改めたらいいのだろうか。いちいち悩む時間がどこにある？ 生活のこまごまとした部分について一〇〇〇のルールを勉強して、ケチャップはプラスチック入りとガラスびん入りのどちらを買えばいいかまで理解することはできる。でも、そういうルールは不変の真理などではなく、たいていは状況しだいで変わるものだとしたら？ そこまで学びたがる人がどこにいるだろう。

私たちはたびたび選択を迫られる。「気候変動が思いきりひどくなるのと、強圧的な政治体制を支持することになると、ブラジルの多雨林で生物が絶滅する結果につながるのが選択肢だとしたら、どれ

を選んだらいい？」濡れぶきんのときのように明快な答えが出るケースと違って、何をどう判断するにも不確かさが消えることはない。どの道に踏みだしたとしても、そこはかたない罪の意識がつきまとう。さらには、一部の人があり余る資源を浪費する一方で、利用できる資源がなきに等しい人もいる。この現実を思うと、やまじさと罪の意識が一段とつり、単純明快さはますます遠のいていく。どう考えればいいかわからなくて身動きがとれないというのは、嘘偽りのない実感である。

この状況にけりをつけたくて、「考えないようにする」という答えに走る人は少なくない。悩んだあげくに、「まあ、どうせひとり人間の間にたいしたことはできないからね」という姿勢に落ちつくのである。しかし、数滴のガソリン漏れが積もり積もってエクソン・バルディーズになるように、ひとりひとりの行動がすべて合わされば実際に違いを生むものだ。それに、なんだかんだいって、あらゆるムダを減らしたいというのがほとんどの人の本音であって、どの選択が「正解」かがわかりさえすれば普通はそれを選ぶ。

これが私たちの抱える矛盾の正体だ。いまは情報時代なので、理屈のうえではたいいのことについて知識が手に入るはずである。だが、現実にはそううまくはいかない。現代は生活のさまざまな側面がつながり合っているせいで、数々の複雑なシステムどうしの相互作用がかえってつかみにくくなっている面もある。イギリスの哲学者トマス・ホップズは「地獄とは、真実に気づくのが遅すぎることである」という名言を残した。それでも、まずはとにかく真実に気づくことが私たちの課題なのである。

やはり消費を抑えるしかないだろうとの声もある。いまより少ないモノでどうにかやっていこう、と。なるほどと思える賢明な助言ではあるが、それこそが採るべき道だとはいえない。だって、どれくら

い削減すればいい？ それに、どこを削る？ アンチロック・ブレーキシステムや出生前診断をちよつと省く？ 冷蔵設備やがん治療薬を減らす？ ピザを食べる回数を少なくする？ それともトッピングを控えるにすればそれでいい？ 世俗的な快楽と消費を遠ざけて修行僧のように生きるだなんて、西側に暮らす大多数の人間には無理な相談だし、そうしてみようとすら思わないだろう。だとすれば、これもまたどう見ても正解ではない。

こんなことを考えていたら途方に暮れるばかりだ。それでも、斜^{ハヤ}に構えて人の努力をあざ笑ったり、複雑さに嫌気が差してさじを投げたりしないことが大事である。ムダを最小限に抑えるような、あるいはせめてムダを減らすような生き方はかならず見つかる。とはいえ、そもそもどれだけのムダをなくせるものなのだろうか。

この疑問に突きあたったとき、本書のテーマは変わった。初めは、ムダとはどういうものを学ぶ本にするつもりでいた。だが著者ふたりがそれ以上に興味をそそられたのは、ムダがなかったら世界がどんな姿になるかを考えることである。これっぽちのムダも存在しない世界。紙ゴミも出なければフードロスもない。時間もムダにならず、優れた頭脳や人の命が空しく失われることもない。

こういう疑問を投げかけることにはどんな意味があるだろう。もちろんこれは頭の中のシミュレーションである。本当にムダのない世界に生きなければ、私たちが森羅万象についてほぼ完全な知識を得ていないといけない。だが、そんな日は絶対に来ない。それでも、どこまでなら挑めるのか、その限界までどうやって進めばいいのか、それを見きわめる作業に本書では取り組んでみたいと思っっている。

一本の物差しを思いうかべてほしい。その右端には、完璧な効率に支配された世界がたたく。ここにはいつさいのムダがなく、一〇の力が一〇出る状況があらゆる場面で当たり前になっている。左端には、すべてがムダでしかない世界が広がる。時間という時間が、金という金が、何から何までがことごとくムダにされている世界だ。本書のためのリサーチをする過程で、いまの私たちは大きく左に寄っていることに著者ふたりは気づいた。ムダしかない世界は目と鼻の先である。いったいなぜ？ どうすればそんなことに？

人間がこれだけのムダをまき散らしているのは、ムダを正しく理解していないからだと著者ふたりは確信するようになった。効率の悪さと誤った情報と一緒にあってムダだらけの世界をつくりだし、気づけば私たちはその中にいる。それはどういう仕組みによるものだろうか。

ムダのない世界に向けて先ほどの物差しを移動していくことはできるし、そうすれば誰もがいまより幸せで健康な暮らしを送れる。それが本書を通して伝えたいメッセージだ。

これは政策についてとやかくいうための本ではない。もちろん、政策の問題にいつさい切りこまないわけではなく、ペットボトルのデポジット制度はうまくいっているのか、レジ袋の使用を法律で禁止してどれだけの効果があるのかといった話は登場する。ただ、本書では政治的な選択よりも、科学や経済やシステムのほうに軸足を置いている。恥ずかしさや罪の意識を抱かせることで何かをさせようというのが本書の狙いではない。そうではなく、著者たちと同じ探究の旅に読者をいざなうことで、なぜムダが生じるのかを理解してもらおうとともに、ムダのない世界がどういうものかを思いえがいてもらうことを目指している。

ムダとは何か

その昔、ソクラテスは次のように語った（少なくともプラトンは師ソクラテスの言葉だとしている）——「英知は用語の定義から始まる」。なるほど、取っかかりとしてはいかにもふさわしく思える。だが複雑な概念の場合、それが何かを説明するのは往々にしてひと筋縄ではいかないものだ。

たとえば「生命」には、万人に納得のいく定義が定まっていない。なんて奇妙な話だろうか。みんな生物として、これ以上ないほど身をもって経験している現実だというのに。「死」も同じで、定義はひとつではない。「時間」と「空間」をどう定義するかは激しい議論の対象になっているし、家族は「知性」の定義をめぐってつまらぬいさかいをしては、感謝祭のディナーを何度となく台無ししてきた。

考えてみると、人生で遭遇する複雑な概念については、定義で理解するというより感覚で意味をつかんでいることが多い。正義や不正、愛や憎しみ、家族や友人、家庭、健康、信仰、芸術。こうした概念については、たいていの人が頭の中でぼんやりこうだと考えていて、そのとらえ方は周囲の人と自分と

で違っているはずだ。

ここで問題になるのがムダである。ムダとは何だろうか。一見すると、定義に手こずりそうな言葉には思えない。だって、それがどういふことかはみんな何となくわかってるよね？ 定義なんてすつ飛ばしちゃってもいいんじゃないかな。でもソクラテスが聞いたら、ダメに決まっていると首を横に振りそうだし、そんないい加減な本の始め方でどうすると説教されそうでもある。それも当然といえば当然だ。

何を隠そう、ムダ (waste) は非常に理解しにくい概念であり、それはいろいろな文脈で使われるからという理由が大きい。無用の副産物や、本来は有用なのに壊れたり傷ついたりしたものがムダとされることもある。体は衰えてムダになっていく (waste away)。役立たずのムダな土地を指す「荒地地 (wastelands)」という言葉は、実際の地形に対してだけでなく、テレビ番組のあり方に対する比喻として用いられる場合もある（一九六一年に当時のアメリカ連邦通信委員会委員長が、アメリカの商業テレビ番組の現状を「広大な荒地地」と批判し、もっと公益にかなう放送をせよと発言した）。時間や可能性もムダになる。

ところが、実際はムダでも何でもないものまで「waste」と呼ばれるケースもある。たとえば水素を用いる燃料電池が発電すると、副産物として水のみが発生する。この水も「廃棄物 (waste)」と表現されるが、それを本当にムダだと思う人はほとんどいないだろう。少なくとも、化石燃料を使った発電から生じるCO₂を見る目と同じではないはずだ。

まずは広い意味でのムダを考えてみよう。どんな場面でも、最適な結果が得られていなければムダとあっていいだろうか。あるいは二四時間のうちで、しなくてもいい仕事や誰の役にも立たない作業をし

ていたら、その時間をぜんぶ足して「ムダ」と呼んでいい？ 行きたい場所に向かうのに少し余分に歩かざるをえなかったら、それもムダのうちに入る？ 渋滞に巻き込まれたときの一分一分もムダ？

そういえないはないが、この見方にはふたつの欠点がある。ひとつは、どれも個人のとらえ方ひとつで決まるものにすぎず、絶対的というより相対的な基準だということ。少しのあいだ渋滞につかまったのは、心臓発作を起こした人を助けるために救急車が病院へ急いでいたせいかもしれない。社会全体として見たときに、ひとりひとりにあてがわれた渋滞時間が最適かそうでないかは知りようがない。もうひとつは、人間の能力や理解力に限界があるために、ある種の出来事が起きるのを避けられない場合もあるということである。だとしたら、それにムダのレッテルは貼れない。余分に歩く羽目になったといつても、歩道の真ん中に大きな穴があいていたのならよけないわけにはいかないだろう。

このように、広い意味でムダを定義すると多少の問題が顔を出しはするものの、使い勝手のいい考え方はある。というのも、ムダを理解するうえで欠くことのできない三つの要素がそこから浮かびあがるからだ。ひとつ目の要素は、ムダは望ましくないということ。つまり、チョコチップクッキーを焼いているときの甘い香りはムダではないけれど、工場の煙突から立ちのぼる硫黄の臭気はムダである。ふたつ目の要素は、何らかのコストがいやおうなく発生し、しかもすべて差し引きした最終的な利益が、コストを上回らないこと。この定義でいくと、あなたの隣の家のどんちゃん騒ぎや音楽がうるさくてろくに眠れなかったとしても、その夜自体が間違いなくムダだったとはいえない。利益は実際にあったわけであって、ただそれがあなたではなく隣家に与えられただけである。三つ目の要素は、ムダは避けられるものでなくてはならないということ。仮に避けることができず、津波が島を襲って町を破壊した

ような場合、それは悲劇であってムダとは呼べない。

ムダを支える三本の柱——望まれておらず、差し引きするとマイナスになり、避けることができる——が明確になったので、次の疑問へ進もう。ムダとはどういう種類の物事か、である。ムダという単語自体は、名詞（ムダ）としても動詞（ムダにする）としても、形容詞（ムダな）としても使われる。さらにややこしいのは、何かをつくることと壊すことのどちらに（もしくは両方に）ムダがかかわってもおかしくない点である。本書ではほとんど名詞としてこの言葉を使用していて、その場合はムダにされたモノそのものを指すこともあれば、ありえた姿と現実の差を意味することもある。

いま現在は特定の結末が避けられなくても、理論上はテクノロジーで解決できるケースはあり、そうした事例についても本書では目を向けていく。

こういうふうにとらえるとムダの間口は広くなり、天然痘や原油の流出や、早すぎる死も十分ムダに含められるようになる。ただし、ムダのカードを安易に切りすぎないように注意するのが肝心だ。たとえば水は本来、壊されるものでもつくられるものでもない。だとしたらそれを本当にムダにすることができるだろうか。紙のムダというけれど、それが再生可能な資源だとしてもそう思う？ 怠け者が毎日のらくらマリファナを吸っているだけだからといって、やりたくてそうしているなら人生をムダにしているといえる？ その気になれば睡眠時間を削れるのにそうしてないのだとしたら、余分に寝ている時間はその人にとってムダにあたるのだろうか。こうした疑問については、本書を進めていく過程ですべて取りあげていく。

ムダに関しては、最後にもうひとつ目を向けておくべき側面がある。カメラを思いきり遠くまで引い

て、二〇〇億年の時間軸で宇宙を眺めわたしてみてもよい。宇宙のスケールに比べたら何もかもが究極には無意味であって、人間のどんな活動もひとつ残らずムダだと考えも成りたつ。シェイクスピアのマクベスのセリフではないが、それはしよせん「愚か者のしゃべる物語だ。響きと怒りはすさまじいが、意味など何もありはしない」のである。こういう視点に立つと、生きているあいだに私たちがどれだけ素晴らしい行動をとろうと、沈みゆく船の上で真鍮を磨いているのと大差がなくなる。

しかしそれがムダだといえるのは、人間という存在自体に、永続的な価値がもともと備わっていない場合に限られる。右のような虚無主義に走りそうになつたら、よくよく考えてみたほうがいい。

先ほども説明したように、本書でムダを定義するうえでは、それが「望ましくない」という点が必要な特徴のひとつである。この考え方には、暗に「人間にとって望ましくない」という含みがある。私たちは抗生物質を飲んで何十億という腸内細菌を虐殺しているのに、彼らの命を現代医学が容赦なくムダにしたことなどほとんど気にも留めない。さらにいえば、私たちがベーコンを食べるとき、豚からすればよくも命をムダにしてくれたなといいたくなくともころだが、人間がそれをムダとみなすことはまずない。

物事に価値を割りふれるのは人間だけであるかのようにして、たいいていの人は生きている。夕日が美しいのは夕日自体が美しいからではない。私たちがそれを美しいと宣言するからである。動物の命までもがその延長線上にある。私たちの目に可愛いらしく映るかどうか、私たちの役に立つかどうかという理由で、人間がいささか気まぐれに認めた場合にのみ動物は価値をもつ。だから私たちは、殺虫スプレーでゴキブリを大量死させる一方で、アザラシの子どもを保護する法律をつくる。だが人間の命に関

しては、どんな人間であつても人間であるだけで価値が内在しており、それが根拠となつて人権という考え方が生まれた。本書でもそういう視点をベースにしてムダを語っていく。

どうしてここで哲学めいた話が出てくるのかと、不思議に思っているかもしれない。なぜかというところラテスの勧めに従つてムダを定義する際には、それが純粋に価値判断の問題である、ことを定義に盛りこむべきだからである。絵のように美しい景色にゴミが散乱しているのが不快だとすれば、それは私たちがそうみなしているからにすぎない。つまり、価値は低いものから高いものへと塔のように積みかさなつていて、その序列のどこに位置するかに照らしてすべてのムダを考える必要がある。この堂々たる塔の最上階にはいろいろな物事が収められている。いくつかあげるなら、個人の自由、母なる地球、困窮と不幸に終止符を打つこと、生きとし生けるものと仲良く暮らすこと、自分の子どもや祖国、あるいは自分の信仰する神の御心、などが思いつくかぶ。

価値観はひとりひとり違うので、何かムダかそうでないかで全員の意見が一致するとは限らない。絶対的な価値体系が存在しないのなら、こんな本は書きようがないじゃないかといいたくなる気持ちもわかる。でもそこまで悲観しなくても大丈夫だ。故ジョン・F・ケネディの次の言葉を見れば、その理由がよくわかるはずである。「われわれをつなぐ最も根本的な絆は、誰もがこの小さな惑星に住んでいることです。みなが同じ空気を吸い、みな子どもたちの未来を大切に思っています。そして誰もが限りある命を生きているのです」(一九六三年にアメリカン大学で行われた演説の一部)。基本的には価値観の重なりあう部分がそれなりに大きいからこそ、私たちは協力しあつて平穩に暮らすことができている。そうでなければ、人類が文明を発達させることはなかつただろう。



第 I 部

ムダと環境

したがって、私たちが一定の基本的価値観を共有しているという想定のもとにこの本は書かれている。たとえば、私たちの誰もがきれいな空気を好み、針の付いたままの注射器が海岸に漂着するのを望まず、人間が苦しむことができるだけ少なくしたいと考えている、といったことである。また、人間には存在自体に価値があるという前提にも立っている。たとえ宇宙が冷えきって終焉を迎えても、ひとりの人間の生命の価値が失われることはないのだ、と。

平たくいえば、私たちひとりひとりがここにすることがそれだけで大事なのである。